

Development of the Salt Reduction and Efficacy Maintenance program in Indonesia

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2019-12-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/46903

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



平成28年8月24日

博士論文審査結果報告書

報告番号

学籍番号 1329022030

氏名 Andi Masyitha Irwan

論文審査員

主査(職名) 城戸 照彦(教授)



副査(職名) 北岡 和代(教授)



副査(職名) 加藤真由美(教授)



論文題名、 Development of the Salt Reduction and Efficacy Maintenance Program in Indonesia (インドネシアにおける減塩と係る自己効力感維持のためのプログラム開発)

論文審査結果

【論文内容の要旨】

目的は、インドネシアの高血圧症を有するもしくは高血圧症の危険域にある地域高齢者を対象に開発した塩分摂取を減少、そして維持させるためのセルフケア・自己効力感に係る介入プログラムの効果を検証することであった。研究参加者はインドネシアの1都市に居住する60歳以上の高齢者51名であり、分析対象者は45名であった。本研究は金沢大学医学倫理審査委員会から承認を得て実施した(承認番号:546-1)。研究デザインはランダム化比較試験(RCT 番号:AEARCTR-0001204)であった。介入群は通常のケア+減塩と係る自己効力感維持のためのプログラムが実施された群(SREM群)(15名)であり、対照群は2種類あり、'減塩ができ、自己効力感が改善したか'を検証するために比較する「通常のケア群」(17名)と、'減塩が維持でき、かつ自己効力感が維持できたか'を検証するために比較する「減塩群(SRT群)」(13名)であった。プログラムはOremのセルフケア不足理論、Banduraの自己効力感理論、高齢者の学習理論を基盤に開発された。分析はone-way between groups ANOVA, one-way repeated ANOVA, Tukey's test等を用いた。スープ内の塩分濃度は、SRT群において $3.2 \pm 3.3\%$ から $1.1 \pm 1.5\%$ へと推移したが、その後 $3.8 \pm 2.7\%$ ($p < .05$)へとリバウンドした。一方、SREM群ではリバウンドなく推移した。SREMは高齢者の高血圧症、セルフケアに関する知識を改善させ、さらに知識の保有を維持させることができ、塩分含有量の多い献立づくりを増加させることなく維持でき、また自己効力感を改善し、それを維持できる点で高血圧症を有する、もしくは高血圧症の危険域にある高齢者に有効なセルフケア方法であることが示唆された。

【審査結果の要旨】

適切な理論を組み合わせて減塩のセルフケア行動を単に改善させるだけではなく、それを維持できる方法を開発したことは世界的に新規である。検証はRCTにて、食物・尿中の塩分量を測定するなど客観的指標が使用され科学的に遂行された。公開審査会では質疑応答を適切に答えていた。以上、学位請求者は本論文の論文審査及び最終試験の状況に基づき、博士(保健学)の学位を授与するに値すると評価する。